

2010 年度報告書（研究員）

氏 名	木村 至聖
職 位	短時間研究員
<p>研究概要</p> <p>今年度は、「産業社会の変容からみる親密圏と公共圏の再編成——脱工業化論の再検討」というテーマで研究を行なった。</p> <p>ダニエル・ベルによって「脱工業社会」なる概念が提唱され、工業によるモノの生産経済から情報・サービス経済への変化が指摘されてから半世紀近くが経つ。今やこの概念は、もはや社会学者による未来の予言ではなく、普通に生活をする人々にとっての現実として生きられている。それでは、今こうして「脱工業化」が自明とされる時代を生きる私たちは、その変化をいかに経験し、かつ捉えかえすのだろうか。本研究は、近年さかんになってきている産業遺産への関心の高まりに注目し、それを通して地域社会の社会関係のあり方がいかに変容しつつあるのかをとらえることを目指した。</p> <p>今年度はこうしたテーマのもと、日本の旧産炭地における産業遺産の活用をめぐる「親密圏と公共圏の再編成」を、1) 近代社会における文化遺産という表象装置の変容、2) 地域社会におけるガバナンスの模索、という二つの切り口から分析し、これまでの研究成果を整理するとともに、新たな文献研究を追加した上で博士論文『文化遺産と記憶の社会学——旧産炭地域における産業遺産の保存と活用をめぐる』としてまとめ、京都大学に提出した。また、成果の一部は、日本社会学会にて、「地方都市における産業遺産の「資源」化のはらむ可能性と課題——長崎市・軍艦島を事例として」というタイトルで発表した。</p>	
<p>業績リスト（著書、論文、報告、その他に分けて主要なものを記入する）</p> <p>【著書】</p> <p>「権力と主体形成 M.フーコー『監獄の誕生』『社会学ベーシックス 第9巻 政治・権力・公共性』世界思想社、2011年3月</p> <p>【学会報告】</p> <p>「地方都市における産業遺産の「資源」化のはらむ可能性と課題——長崎市・軍艦島を事例として」、第83回日本社会学会（於 名古屋大学）、2010年11月</p>	

